

## ビッグ・データ時代の心理学

千葉大学 名誉教授

柏木繁男 (かしわぎ しげお)

現代は心理学応用の時代です。千葉大学に在職していた頃から、その動向に気付かされてきました。毎年のことでしたが、希望の学科で臨床心理学を勉強しようと思ってきたのに、その期待が満たされない。これには失望したという学生が多かったからです。私自身、同じような経験から、1954年の学部卒業と同時に、当時の日本国有鉄道・労働心理研究室に就職しました。

就職直後の仕事が心理テストと鉄道現場でのヒューマン・エラーの関連分析でした。学生時代には予想もしなかった、サンプル2万を超えるビッグ・データとの対面でしたが、知能テストとヒューマン・エラーとの間には何の関連もないという、当時世界的に検証済みの事実の検証でした。しかし、内田クレペリンの曲線変動には、ごく僅かながら関連性がありそうだ、という「予想」でした。それまでに提案されていた相馬の平均曲線との相関係数法は、手計算時代の当時は計算に膨大な時間が必要で、実用性がありませんでした。そこで、アイテム・テスト原理による曲線変動評価法を提案し、「予想」の検証に成功しました。

最近、上野一彦・東京学芸大名誉教授の新版日本語 WISC-IV についての因子分析的解説を聞きました。分析は、繁穂算男・東大名誉教授が中心となって行われたものです。初期版日本語 WISC は「3 因子説」だったそうですが、欧米での「エヴィデンス・ベースドな臨床的経験」から「5 因子説」へと検証が拡張されているようです。同じようなことは性格特性研究でも行われていて、アイゼンクの3 因子説からゴールドバーグの5 因子説へと検証が拡張されています。ただし、性格特性の場合は WISC のそれに比べて、エヴィデンス・ベースドな臨床的経験の更なる積み重ねが必要のようです。余談になりますが、欧米人は5 因子説が好きのように思えて、可笑しさすら感じます。

統計学・SNS (ソーシャル・ネットワーキング・サービス)・対策志向的洞察力の三つが現代のビッグ・データ処理には不可欠視されています。カウンセリングや心理テストに代表される心理学的諸手法が本当に役立っているのかどうか、これが心理学の将来を決定付けます。各種統計パッケージの普及に伴い、『心理学研究』等に掲載される学術論文で、多変量の接近による研究例も急増しています。しかしながら、問題は、複雑複合化が急加速している社会的諸問題の心理学的解明が可能か否かです。現代の心理学には、エヴィデンスと対策志向的提案が求められています。



### Profile — 柏木繁男

1930年、会津若松市に生まれる。1954年、東京大学文学部心理学科卒業。日本国有鉄道研究員、東洋大学教授、千葉大学教授、城西国際大学教授を歴任。主な著書は『性格の評価と表現：特性5因子論からのアプローチ』（有斐閣）、『内田クレペリンにおける解析的評価法』（金子書房）、『応用心理学の基礎』（八千代出版）、『組織の情報管理：心理計量学のすすめ』（講談社現代新書）、『コンピュータによる因子分析法』（共訳、科学技術出版社）など多数。